

D-7 Self-reward 行動様式における Power の効果 — 賦理論への一つのアプローチ —

広島大教育 伊藤 富美
○田中 恵子

1. 子どもの賦において賞罰は欠かせぬ要素である。従来、社会的学習の分野では、外的に統制された賞罰に注目していたが、人間において自身で統御した強化（賞罰）は、学習及び行動様式の維持の為の潜在的な強化となり、それは又、外的に統御された強化よりも強力な誘因となり得る。本研究は、この自己強化による学習効果を賦の方法に適用するべく試みられたもので、まず、自己強化に及ぼす Power の効果と Power を受容する子どもの能力を知的側面から実験的に検討した。

2. 被験児は、小学校4年生36名を対象に知能上位群と下位群に分け、更にこの2群のそれぞれの半数に Power 操作を行なう。実験装置はボーリングゲームを用い、自己報賞行動様式のトレーニングとモデル間の矛盾を経験させた後、一人で試行させる。測定は各試行における報賞行動の有無、自己報賞の回数、トレーニングされたルールへの従順度をもって行なわれる。

3. 被験児が自己の行動を報賞に値すると判断するレベルは Power 操作したグループの方が、又、知能の高い子どもの方が高い。即ち高い基準を持つルールに従順であり、低い報賞基準を持つモデルに曝された後も報賞基準の低下は少なかった。又、知能の上位下位両群共に Power 効果及び同条件下に於る知能差が認められ、知能の高い子どもの方が Power に敏感であろうという仮説は、若干の支持のみで統計的有意差を認めるに至らなかった。